



# てじな



まるど88

## てじな

仕事をなくした義郎は、それでもどこか、清々しい気持ちで平日の大阪の町を歩いていた。そういえば仕事していたときには、まるで嘔まれたガムみたいな、しけた顔をしていたと、自分でも思う。

ごみごみした国道沿いの歩道を歩く。もし仕事をしていたら、今ごろこんな、自由な気持ちで歩けることもなかったんや。そやけど、むこうに通天閣が見え隠れするここ、西成も、もうちょっときれいな町にならんと。あき伍もその辺に散らかってるし。

などと思いつつ、夏のむし暑い、くもり空の下を歩いた。国道は、平日の昼間とあって、車が忙しそうに、何台も走っていた。けしからんことに、義郎が仕事をしていた会社は、雇用保険をかけていなかったのだった。給料明細には、かけているような書き方をしていたのだったが、だいたい、給料明細にしても細かい項目が書いてあって、なんだかよく分からないのだった。だから、失職して一週間、どんと貯金は減っていくのだった。すぐにも仕事、探さねばならない。が、せめてあと一週間、いや、二週間、ゆっくりしたかった。

「あそこの、古ぼけたテント小屋、まえから気になってたけど、サーカスかなにか？ ちょっと行ってみよう」  
国道沿いの歩道からいつも見えていた赤いテントの屋根。手前の、いつもシャッターが閉まっている倉庫にさえぎられて、上半分しかいつも見えていなかった。自転車で通勤しているときには、気持ちに余裕がなくて訪ねてみることもなかったのだが、いつでも自由となった今、行ってみようと思った。

「まあ、待て待て。いつでも行けるんや。それより、なんで今、わしはここにいるのか、ゆっくり考えてみよう。そや、あそこの販売機でコップ酒を買って、と」

首にかけた手拭いで首を拭きつつ、むし暑いなあ、などと言いつつ、歩道沿いにある、そばの酒の販売機のほうへ行く。

「昼間から酒が飲めるんやぞ。ええやろほんまに」

なにを急いでいるのか、必死で走っているみたいな車が、大阪、西成の四十三号線という太い国道を、ひっきりなしに通ってゆく。

「おととつと」

危うく、人をけとばしそうになった。お酒の販売機のそばに、上半身裸の男の人が、寝ていたのだ。男は上半身をむくっと起こした。

「わあっ、すんまへん！」

そんなところに寝ているのが悪いんやろ、とも思いつつ、こんなのに言うても分からんやろなとも思いつつ、大急ぎで自販機で二百円のキクマサを買う、すぐ近くの公園に向かった。

「もう一、こないだまで働いてたところは、話にならんっ！」

草がぼうぼうで、手入れもされていない小さな公園のベンチに仰向けに寝転がりながら、ときどき亀みたいに頭を起こしてはコップ酒を飲む。

「タモンもええけど、キクマサもいけるな。あー、空が青いなあ。こないだまでおった、学校のそうじの会社は、話にならんのだ。その前のお、穴掘りはあ……」

亀のように頭を起こして、半分残ったキクマサを飲んだとき、コップ酒の角度を高く上げすぎて、顔にだいぶ、ぶちまけてしまった。

「うわあっ、もうええ、もうええ！ よしっ、心機一転や。そのまえにちょっと、腹ごしらえしよう。あー、気分よくなってきた」

公園から出て国道沿いの歩道を再び歩く。そして、一軒のコンビニに立ち寄った。

コンビニにはいろんな食べものが置いてあった。

「どれにしようかなあ」

さんざん迷い、十分くらいも考えあぐねた挙句、のり弁をレジへ持っていく。

「三百十五円」

「あのお、おハンも入れてもらえますう？」

「え、」

レジを打っていた店員だか店長だか、たて縞の、コンビニの制服を着た中年男性は（なぜか丸刈りである）、無造作に割りバシを、いましがた弁当を入れたビニール袋に放り込んだ。

「あつすんまへん。あつためてもらえます？」

「何」

店員だか店長は、こっちをちょっとにらんだかと思うと、す早く弁当をビニール袋から取り出すと、後ろを振り向いて電子レンジに放り込んだ。

電子レンジのなかでのり弁がぐるぐる回っている間に、勘定を支払う。あいにく、一万円札しかない。小銭はさっきのお酒で使ってしまったので、一円玉が三枚きりである。「大きいのしか、ないんですけど」

店長は黙って義郎の手に持った一万円札をさっと抜き取ると、レジの中に放り込むと、千円札を出し、

「いちまい、にまい、さんまい、よんまい」

と義郎の前で数え、

「九千円」

そうして小銭も義郎の手に渡した。チーン、と電子レンジが鳴った。気がついたときには義郎の右手には今のおつり、左手には温いのり弁と割りバシの入ったビニール袋が握られていた。何につけ、素早い男のようである。店員はほかにいないようだったので、一人店長兼店員なのだろう。学生ふうの女の子が二、三人、雑誌のコーナーで立ち読みをしていた。

店長は、はたきを持って店内を掃除し始めたようである。とは言っても、どこもはたく様子はない。なんではたきを持っているのかと思っていると、義郎の背中をはたきで追っているようなのである。

思わず店の外へはたき出される義郎。コンビニのドアを出るとき、ちらっと左の雑誌売場のほうを見やると、女学生が二人、こっちを見てくすくす笑っているのが見えた。

笑われても仕方がない。だが、なんでや。ちょっと待てよ、なんでこんな仕打ちを？ と思いつつ、反射的に足は、今しがた酒飲んで休憩していた公園のほうへ向かっていた。おなかですいていたのだ。腹ごしらえしてから考えてみよう。もう、ほんまに。酒臭かったからか？ そうなのか。そやけど、酒飲んで買いもんして、何か悪い。と思いつつ歩くうちに、さっきの公園までやって来た。

のり弁をほおばりつつ、公園の水道でのどをうるおす義郎。樹木の緑がまぶしい。セミが鳴いている。むし暑いのと、さっきお酒を飲んだのとでのどが乾き、思わず、公園の水汲み場の水道を上に向けて、蛇口を口にくわえて飲んでしまった。ほっぺたが水でふくらむのが心地良い。魚がえら呼吸するように、ほっぺたをふくらましたりすぼめたりしながら、蛇口にほおばって飲んでみると、

「こらーっ！」

公園の外から、小太りの中年女性がこちらをにらんでいた。

「口つけるなー！」

「こ、これでもわしは若い頃、詩人になって、世の中を変えるアーティストになろうと、思ってたんじや。それが、あんなおぼはんにい」

そう一人言を言いつつ、弁当の残りを、ベンチの片隅に座って食べた。その昔、もう三十年も前、義郎の髪がまだ黒々としていて、今みたいに白髪だらけで、てっぺんの薄くなる前、高校の同級生だったある親友が、彼の作った詩を激賞してくれたのだ

った。その親友とは、高校をさぼってはそいつの家に遊びに行き（昼間は家に誰もいなかった）、酒を飲んだり煙草を吸ったり、ビートルズを大きな音で聴いたりして、勝手気ままに過ごしていた。親友のそのまた親友という、別の高校の、フォークシンガーを目指している奴がまた、学校をさぼってやって来て、義郎とも意気投合し、彼に太宰治とボブ・ディランを教えた。そうして「お前の詩、見どころがあるぞ」等と、さかんにおだててくれたのだった。

世界が潰れてしまえばいい、等と言いつつ、安いウイスキーを飲んで、くだを巻いていた。弱い奴が虐げられ、要領のいい奴や強い奴がのさばっている高校生活。結局は世の中もおんなじじゃないのか、とか氣勢を上げていた。一九七一年だかそんな頃だ。

「あの頃は、良かったなあ！」  
思い出しながら、義郎はコップ酒を片手に、もう片っぼうの手の指には吸いかけの煙草をはさんで、しみじみしていた。ところがそのあと、どうだろう。勉強なんかつまらん、とぐうたらしていた義郎を尻目に、彼の親友（村田という）は、高校三年になると図書館通いを始め、猛勉強をし出したのである。そしてとうとう、早稲田大の文学部に入学した。将来はジャーナリストになるんや！と息巻いていた。

あとから義郎の親友になった、義郎に太宰治とディランを教えた奴は、早くに結婚して八百屋のおやじになった。大学受験に失敗した義郎はある夏の日、東京にいる親友、村田の下宿を訪ねた。新作の詩を書いたノートも、忘れずに持って行った。

「なんだこれ、お前まだこんな事やってるの」  
「ええっ…」  
「お前さあ、うちの大学の文学部の奴、どれだけ、頑張ってる奴がいるのか知ってるかい。お前の詩なんか話にならないぜ！」  
「えーっ？ まえ、誉めてくれたやないか」  
「何言ってるんだい！」  
「ま、まあ気を取り直して。今夜はひと晩じゅう、語り合へんか。お酒も持ってきたで」  
「語り合へんかってお前、どこで語り合うんだよ。お前今夜、どこに泊まるんだい！」

「ええっり… いや、あの、村田の……」  
言葉ですっかり東京弁になっている。高校のときの、あの気安さは、どこに行ったんや？ と愕然とした思い出がある。その、二人の親友以外にも、一緒に酒飲んでくだ巻いていた連中が三、四人いたのだったが、一人を除いては皆、義郎の詩にも目もくれなくなっていた。ようするに、個性と存在感の強い、二人の男が義郎の詩を誉めるので、自分達も合わせていただけだったのだ。

残る一人は義郎の詩を気に入ってくれていたのだったが、ある、つまらないことで気まづくなり、音信が途絶えてしまったのだった。  
「けっきょくみんな、仕事もって、いっちょ前の顔して、世の中の矛盾にも立ち向かわんと平凡な男になってしもうただけやないか。ジャーナリストになるとか言うてたくせに、大学卒業したら学校のセンセになって、子供ようけ作って納まってしもたやないか。また、八百屋やってる奴かって、わしの詩、ちんぷんかんぷんやいうて。高校のとき、あんなに誉めてくれてたくせにっ」

最後の一本を、すば一っとしみじみ吸う。コップ酒の残りをぐいっつとあおる。あー、明日もあさっても、仕事する必要ないんだ。と思いつつ、貯金の残りを考えたら、今住んでいる安アパートも、来月には出ないともう、生活して行けないのだった。そのあと、どうする？ この天才詩人が、どうするんや？ この就職難のときに、などとも考えた。

「そや、お金、今残り、なんぼあるかな。千円札が、いちまい、にまい、なんか、番町皿屋敷みたいやな。お皿がいちまい足りません、いってか？」  
ことさらに明るい笑顔で、サイフに入っているお札を数えた。わいは、こんなとこで終わる人間やない。まして、ルンペンで終わる人間やない、と、本当はインテリの筈の、天才詩人はお札を数えた。  
「そや、これからは、楽しいことばかり考えよう。アホな奴ばかり相手にしとらんと。まだわいには九しえんえん、ある。それに、銀行には十一まんえんも、あるんや」  
とうなずきつつ、鼻歌を唄いながら数えた。

「あれ？」  
どう数えなおしても、千円札が八枚しかない。たしかあれから、わしは千円札は小銭にくずしてないぞとサイフを覗く。小銭は六百八十八円しかない。  
「九千六百八十八円ないとおかしいのに、なんで八千六百八十八円しかないねん？」  
ピンと来た。おつりごまかされたんや。どうもあのコンビニの店長、うさん臭そうやった、と、だんだん腹も立って来て、ベンチから立ち上がり、  
「もう一ほんま、とっちめたる」  
と、コンビニへ行って、どうしたものかとシミュレーションしてみた。がみがみ言って、怒り倒し、無理矢理にでも千円札をこの手に、返させるのだ。  
「言うべきことは言わんならん！」  
悪いことは続くものである。失業した上におつりまでごまかされ。どこぞの本に、前向きに楽しく過ごしたら、必ず運命は好転すると書いてあったので、鼻歌まで唄ってお札を数えたというのに。

くだんのコンビニにやってきた。店内は、夕方が近づいたせいか、数名の客が入っていた。つかつかとレジのところへ行く。店長の男は、手を後ろに組んだり、ぶらぶらさせたりして暇そうにしていた。

「あ、あのうー」  
「ん？」  
店長は、じゃまくさそうにこっちをにらんで対応してきた。ひるんではいけないのだ。  
「せ、せんえん、おつりが足りないんですけど」  
と、サイフを開いて見せた。さっきの弁当が三百五十円、おつりは一万円札からだと九千六百八十五円なくてはいけないこと、もともとあった小銭が三元だから九千六百八十八円なくてはいけないこと、なのに実際は八千六百八十八円しかないこと。  
「……なんですか？」

「知らん！」  
そう強く言った店長は、食べものを持ってレジに来た客に應對を始めた。  
抗議は不発に終わった。仕方なく、おなががまた空いてきたこともあり、おにぎり一個と缶入りお茶を買うことにした。ひょっとして、こちらの勘違いかもしれず、店長の、悪意ではない、したがって義郎も、こけにされたのではないことを、確かめたかったのである。そのためにはもういちど、この店長にはおつりを出させる必要があった。

「二百三十一円」  
と店長が言う。  
「はい」  
と義郎は千円札を一枚、そして一円玉を一枚渡した。じゃらじゃらじゃらと、店長から義郎に小銭のおつりが渡された。目を皿のようにして数え直す義郎。  
「後ろが、つかえてるんやけど」  
投げやりな店長の言葉に、はっと我に返る。後ろを振り向くと、たしかに若い女が一人、並んでいた。コンビニの外に出て、数え直す。  
「七百と、七十えん。たしかにある。よしっ、さっきはわいの勘違いやったのかもしれん」  
と、気を取り直して、そろそろ家へ帰ろうと思った。歩きながらおにぎりを食い、缶入りお茶を飲んだ。まだお酒のほてりは残っているが、くよくよしてもつまらん、と、西のほうを見ると、大きな太陽が、遠くに見える倉庫が何かの建物の陰に沈もうと、オレンジ色に輝いていた。

国道四十三号線沿いの歩道に出た。相変わらず、ひっきりなしに車が走っていた。

太陽も沈み、月が昇る頃、一人の、大学ノートを手握りしめ必死で走っている中年の男が、四十三号線沿いの歩道にいた。「何べんだましたら気が済むんじゃーっ」あとひと月くらいしかおれないであろうアパートの一室に帰り、コンビニの袋だらけになっており、また、何がどこにあるか分からないような、いろんなものが重なりあい、転がりまくっている部屋を片付けようと思った。が、捨てるには惜しいと思って、ゴミ箱に入れず、右の物を左に動かしたり、重ね直したりして、なかなかはかどらなかつた。そこで気分転換に何気なく、サイフのなかのお札を数え直したら、千円札が七枚しか入っていないのである。

ほんとうは七枚で正しいのだった。八枚あった千円札のうち一枚を出して、おつりをもらったのだから。しかし、今の義郎は、頭がこんがらかっていた。そして、断固抗議してやろうと家を飛び出すとき、彼のプライドの象徴、詩をいっぱい書いたノートを、無意識のうちに押し掴みにしていたのである。

国道沿いの歩道を目撃する途中、住宅街のほうからざわめきが聞こえた。ふとそちらのほうを見ると、建物の陰に隠れて、上のほうだけ見えている赤いテント小屋が、照明で明るく浮かび上がっていて、そこから聞こえて来るようである。走るのもしんどくなってきた、腰も下ろしたくなってきた。催し物でもやっているのかなと、行ってみることにした。倉庫の横手に狭い路地が見えたので、入ってみた。今までこのあたりは何度も通っているのに、この路地には入ったことがなかった。テント小屋に近づくと、大きな拍手が聞こえた。明らかに何か、催し物をやっているようだ。

路地を抜けると、ちょっとした空き地になっていて、クリスマスツリーの飾りみだいな安物の照明で飾られた赤いテント小屋のまえに、三十人くらいの人だかりが出来ていた。テント小屋のまえに一人の男が立っていて、シルクハットから鳩を出していた。「なんや、手品小屋か」

人だかりの後ろのほうから覗くと、男はランニングシャツとたて縞のズボンに丸刈りと、芸人にしてはさえない格好をしている。何故か、見たような顔である。

シルクハットから次々と鳩を出し、その鳩を一羽ずつ空中に放り投げたら一本ずつ違った色の紙テープに早変わりして落ちてきた。観客は七色の紙テープが落ちてくるのを見てさかんに拍手していたが、手品師の男は、人だかりの後ろのほうでもそもそしながら見物している義郎と目があうと、しきりに手招きを始めた。

人混みのすきまから手品師のほうへと、引き寄せられるように歩いて行った。と、見たら、あのコンビニの店長ではないか。なんのことはない。たて縞の制服の、上着だけ脱いで、下のズボンはそのままで手品をやっているのだ。

「あ、あんたなあっ、手品やるんはええけど、わいのお金、千円、いや二千円、盗ったやろうっ！」

「今からこの人のお札を数えます、皆さん」

と言って手品師は、義郎のポケットからするとサイフを抜き出した。

「こら、勝手なまねやめろっ！」

言い寄る義郎の横で、サイフを開けてお札を数え出した。

「いちまい、にまい、さんまい……ななまい、千円札があります」

観客の人々は、嬉しそうにうなずいている。

「やめんか、言うてるやろっ」

義郎がムキになって抗議しているさまが、また滑稽らしく、観客の笑いを誘っている。

「はい、ななまい」

と、手品師は義郎に千円札の束を渡した。

「いちまい、にまい」

と義郎も、渡されたお札を数え始めた。

「何枚？」

と手品師に聞かれ、

「七枚」

と答えた。

「返しなさい」

「え」

言われたとおり、とりあえず返すと手品師はその束をサイフに戻して、再び義郎に返した。

「サイフを開けてみる」

言われたとおり、サイフを開けてみると、無い。お札も、じゃり銭も！ 下に向けて振ってみても、なんにも出てこなかった。

「そんなボロボロのサイフ、買い替えるよ」

と手品師に言われ、

「う、うるさい、放っとけ」

等と言いつつさまが、掛け合い漫才に聞こえるのか、観客にしきりに受けている。

「ちやう、ちやう！ 皆さん、これはね、芸でもないんです。こいつは泥棒なんですー」

と叫ぶうち、誰かが義郎のズボンの後ろポケットをまさぐっている。勿論、手品師の仕業である。後ろポケットから手品師は、じゃり銭とお札を取り出してみせた。

「あれ、いつの間に？」

急いでお札を数え直すと七枚あった。小銭もたくさんあった。

「そ、そやけど、最初の千円、いや二千円はどこ行った？」

手品師は、おもむろに義郎の正面に立つと、義郎のズボンのなかに急に手をつ込み、くしゃくしゃの千円札を引っ張り出し、鼻をつまんでひらひらさせた。観客は笑い転げた。

「もうー、ええ加減にせえ！」

手品師がその千円札をもうひと振りすると、しわひとつない新札に変わった。

十分後、夢中で手品を覚えている義郎の姿があった。観客の前で、手品師に手品のやり方を教わっているのだった。お金も、なくなつたのは千円だけで、それも、手品師のさっきの手品によって、ズボンのなかから手許に戻ったのだということ、理解した。

昼はコンビニ、そして夜は手品の修行をしているこの男に、親近感も覚え始めていた。

シルクハットから鳩を出す手品も成功した。観客から盛大な拍手が沸き起こった。たった十分かそこらで、自分もマジックが出来るようになったのだ。義郎の小さい目は、だんだんうるんできていた。白髪で、てっぺんが薄くても、前歯が抜けていても、腹が出ていても、失業しても関係ない。考えてみれば、悪いのは義郎じゃない。今までの人生、挫折だらけなのは、まわりに見える目があったのだ。

「みんな、有難うー、それっ！」

鳩を勢いよく空に放り投げる。鳩は紙テープに変わらず、どこぞに飛んで行ってしまった。惜しいなあー、惜しいなあー、みたいなことを、観客の人達は言ってくれたのだった。

「惜しかったな」

と手品師も義郎の肩を叩いてくれた。

「こんなに、わしに自信取り戻させてくれたあんたに、そうして今夜、見に来てくれてる皆さんに、ぜひ聞いてもらいたいものが、あるんや。それはあ」

と、子供の頃からの夢だった、自らの詩を一般大衆の前で朗読する瞬間が計らずも、訪れたのである。

大学ノートを掲げて両手に持つ。一ページめから、朗々と読み始めた。

もう、自分の世界に没入しつつ朗読した。手品は、たった十分のうちにわか仕立てだが、詩のほうは、三十年のキャリアである。夢中で読んだ。そして、読み終わった。ノートから目を離し、ゆっくりと顔を上げると、手品のときにはみんな、立ってはしゃいでいた観客らが、いつのまにか座り込んでいて、帰り仕度を始めていて、誰もが無言である。照れ笑いなどして、「あのうー」とか

呼びかけても、一人、二人と帰って行きつつあった。

「なんだこんなものっ」

と、横から手が伸びて来て、義郎の握っていた詩のノートをふんだくった。あの手品師である。

「こんなつまらんもの、こうだ！」

と、ノートのページを破っては口に放り込み、もぐもぐ食べ始めた。それを見て、また面白いパフォーマンスでも始まるのかと、帰りかけていた客らも、また集まってきた。

「やめんかっ、命の次に、大切なもんなんじゃーっ」

言う間に全部、ノートのページをちぎった手品師は、全部それらを食べてしまったのだ。あー、まずかったと言って腹をさすっている。

「今の、こんなつまらん詩が、生まれ変わって皆さんの前に出てきます」

と言うと手品師は、手を後ろにまわして自分のたて縞のスボンの、お尻のあたりにあいていたらしい穴から、白い布切れのようなものをたぐって引っ張り出し始めた。細長い布切れのようなものには、ぎっしりと文字が書いてあった。どう見ても、義郎の下手な字そのものである。

「わしの詩を、尻から出すなーっ」

全部たぐり出された、しかも尻から出てきたらしい自分の詩の書かれた巻き紙を、必死で拾って手品師をしかりつけようとしたとき、

「今からこのおっさんを、消します。いいですか、皆さん。もう、うるさいから」

手品師は怒ったような声で言う、いち、にい、さんと掛け声をかけ、義郎の頭をぱしんとはたいた。煙と共に、ぼんっ、と義郎は消えた。

もう、秋風の吹く頃、下手な字がいっぱい書いてある巻き紙を抱えた一人の中年男性が、誰もいない、赤茶けたテント小屋の前の空地に佇んでいた。あの不思議な出来事のあと、いったいわしはどうなったのや、と、ぼおとした頭をいくら振っても、よく分からない。ただ、くしゃくしゃに巻かれた巻き紙を、こうやって開いてもういちど、自分の書いた筈の詩を読み直すと、何故か知らないが、数段良くなっているような気がする。どこが、どう変わったかも分からないのだが。

さて今から、家に帰るべきか。まだ家はあるんだろうか、それともコンビニに行ったら、あの手品師はいるんだろうか。そもそもあのコンビニは、どこにあったのだったか。そんなことを考えながら、テント小屋の、テント地の破れた部分が秋風にはためくのを見ていた。空は青く晴れていた。

## てじな

<http://p.booklog.jp/book/109114>

著者：まるど88

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/marudo88/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109114>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109114>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ